

《論 説》

《君主の鑑》 (7)

柴 田 平三郎

- | | | | | |
|-----|--|------------|------------|------------|
| I | はじめに……伝統的政治理論とマキアヴェリ | } | | |
| II | <君主の鑑> (<i>speculum principum</i>) | | | |
| III | <君主の鑑>……一つの定義 | | | |
| IV | <君主の鑑>の歴史 | | | |
| (1) | 前 史 | } | | |
| 1 | ギリシア……イソクラテス・クセノフォン・プラトン | | (以上, 第25号) | |
| | 《中間報告》……<君主の鑑>の理論構造(1)
「鑑」の概念……プラトンの場合 | | | |
| 2 | ローマ……キケロ・セネカ・その他の思想家たち | } | (以上, 第26号) | |
| (2) | 成立と展開 | | | |
| 1 | アウグスティヌス | } | | |
| | 《中間報告》……<君主の鑑>の理論構造(2)
「鑑」の概念……アウグスティヌスの場合
<君主の鑑>の理論構造(3)
「鑑」としての書物 | | (以上, 第27号) | |
| 2 | 中世の形成……教皇グレゴリウスⅠ世(1) | | } | (以上, 第29号) |
| | 同 (2) | | | (以上, 第30号) |
| 3 | カロリング・ルネサンス | | } | |
| 4 | エインハルドゥス『カルロス大帝伝』 | (以上, 第31号) | | |
| 5 | カロリングの思想家たち……スマラグドゥス・オルレアンのヨナス・セドゥリウス＝スコトゥス・ランスのヒンクマル | } | (以上, 第32号) | |
| 6 | 十二世紀ルネサンスとソールズベリのジョン | | (本号) | |

I はじめに

ソールズベリのジョン (John of Salisbury, 1115/20-80) の『ポリクラティクス』(*Policraticus*, 1159) が「近代で最もよく知られた君主の鑑¹⁾」(P. J. Eberle) であることについては今日異議を差し挟む者はいない。実際、そのことは<君主の鑑>を扱った数少ない研究書や論文を繙くだけでただちに了解しうることである²⁾。

ところで、ジョンが生き、活躍したのは西欧の十二世紀の真っ只中であり、彼は早くから学者たちによって十二世紀を代表する最高の知識人と評されてきた。例えば、逸早くジョンに注目したレギナルド・L・プールは中世の思想と学問を概観した有名な書物のなかでジョンを「多くの点で彼の時代の知識人の最も素晴らしい典型³⁾」といい、また『ポリクラティクス』だけでなくジョンのもう一つの主要著作『メタロギコン』(*Metalogicon*, 1159) の校訂注釈書をも著し、彼についての本格的な研究を世に問うたC・C・J・ウエップは彼を「イングランドが十二世紀に『最大の中世教会人』として産んだ最も重要な学者であり、教会政治における最も重要な人物⁴⁾」と評している。あるいはまたオランダの歴史家ヨハン・ホイジンガがジョンを「十二世紀精神の最も著名な体现者の一人⁵⁾」として讃えていることは周知のことであろうし、今日にいたるもジョンについてのまとまった研究としては最高水準を維持しているハンス・リューブシュッツの著作は次のような言葉で始まっている。「彼の時代のすべての傑出した人物のなかでも、イギリス人ソールズベリのジョンは十二世紀に『中世ルネサンス』という名称を与える学問の復興の最も著名な代表者として際立っている。⁶⁾」

こうした彼の評価は現在でも決して揺らぐことはない。最新の政治思想事典の一つでジョンの項目を担当したある研究者はジョンを実に「彼の時代の鏡⁷⁾」(Janet Coleman) と評している。

さてそうだとすれば、そうした彼の主著『ポリクラティクス』の検討に入る

前に、是が非でも私たちは彼の生と知の背景である十二世紀という時代の一般の特徴を掴んでおかねばならないであろう。十二世紀とは一体どのような世紀だったのだろうか。

II 十二世紀ルネサンス

西欧の十二世紀が精神史や文化史の面から問題にされるとき、必ず引き合いにだされるのは今世紀の前半、第一次大戦後の1927年に公刊されたC・H・ハスキンスの『十二世紀ルネサンス』であろう。彼はこの書の「序言」の冒頭にこう書いた。

「本書の表題は、多くの人々から、とんでもない矛盾を含んでいると思われるであろう。十二世紀にルネサンスがあったなどとは。あの無知、停滞、暗黒の時代である中世は、それに続くイタリア・ルネサンスの光明、進歩、自由とはまったく対照的な時代ではなかったのか。誰もが現世の喜びや美しさや知識に目を向けず、来るべき世界の怖れを見つめていたあの中世に、どうしてルネサンスがあったのだろうか⁸⁾」

「十二世紀ルネサンス」というターム自体は必ずしもハスキンスの造語ではない⁹⁾にしても、このタームが広く人口に膾炙するようになったのはやはり彼のこの書物の功績といわねばならない。さすがに現在では中世が暗黒であったなどとは誰も信じないが、いまから60年以上も前にこの書物が世に出たとき、それがどんなに新鮮な印象を人々に与えたかは想像に難くない。彼はそこで「ラテン語古典の復活」、「ラテン語の復活」、「ラテン詩の復活」、「法学の復興」、「歴史叙述の復興」、「ギリシア語、アラビア語の翻訳運動」、「科学の復興」、「哲学の復興」、「大学の起源」といった顕著な現象が西欧の十二世紀にはっきりと見いだされるという。そしてこれらの知的復興は彼自身の言葉をそのまま引用すれば、「十五世紀の比較的良く知られている動きと同じ性格をやはり帯びていた」のであり、それはまさしく「中世ルネサンスとしても知られている十二世紀ルネサンス¹⁰⁾」にほかならないというのである。

このハスキンス・テーゼつまり十二世紀ルネサンス説がもちろん何の批判を

も呼び起こさなかったわけではない。それどころか「十二世紀ルネサンス」というタームの使用自体につよい拒否反応が示されたことはよく知られているところである。そのなかでも第二次大戦後ほどなく「いわゆる十二世紀ルネサンスについて」(“The So-Called Twelfth Century Renaissance”, *Speculum*, vol. XXIII, no. 3, 1948.)と題する論文を発表したアメリカの中世史家ニツェエ (William Nitze) の見解はその代表的なものであろう。彼によれば、言葉や名称というものはそれを使用しているうちに本来の意味が縮小したり拡大していったりしていくものだという。例えば、我々は“nice”という言葉が元来“ignorant”とか“foolish”という意味であって、それが長い間にわたってずっと使われていたことを忘れて“*They are nice people.*”というが、それと同じことが“*Renaissance*”にもいえる。即ち、「ルネサンス」という言葉はブルクハルトの古典的フレーズを使えば、十五・十六世紀における古代の再生ということなのである。ブルクハルトが再生ということによって意味していたのは長い間眠っていた何かの単なる復活ではなく、もっと積極的に新たに発見された古代世界の新たな誕生ないし再創造なのであって、それを念頭において十二世紀の古典の再覚醒も考える必要がある。そうすると、十二世紀と十五・十六世紀とでは古典の意義は全く異なっており、前者ではそれはただ古典の伝統の連続でしかないが、後者でははっきりと自覚的な再生であり再創造である。いいかえれば、「キリスト教的、騎士的理想としての古典の連続¹¹⁾」である前者に対して、後者は「直接的過去との断絶とユートピアの古典世界への復帰¹¹⁾」なのである。こうして、彼は「十二世紀ルネサンス」にはっきりと異議を唱え、次のようにいう。「中世学者として私はカエサルのはカエサルに、ルネサンスという用語は〔十五・十六世紀の〕ルネサンスに返しておきたい。¹²⁾」。

ニツェエの批判はほんの一例であるが、一般に十二世紀ルネサンス説に同調しない論者に共通なのは「ルネサンス」概念をはじめから十五・十六世紀のイタリア・ルネサンスとして措定し、それを絶対基準にしてそれとの異同においてものごとを判断する傾向のあることであろう。その点では、パノフスキーの有名なルネサンス論もその範疇に入るかもしれない。彼は美術史家として絵画や彫刻という視覚芸術だけでなく、韻文を中心とする文学表現芸術をも素材に

して「ルネサンス」の本質に迫ろうとした。そこで得られた彼の結論はイタリア・ルネサンスに先行する中世の二つの古典復興——カロリング朝と十二世紀の復興(リナセンシズ)——は古典の受容の仕方が主観的、断片的であり、古典の形式と内容とが結合しておらず、総じて古代を一つの全体として捉えることができなかったという点で「ルネサンス」とは呼びえないということであった。即ち、「大文字のRのついたルネサンス (*Renaissance*) と、私が『リナセンシズ』(*renascences*) と呼ぶよう提案している二つの中世の復興とを区別することが可能であろうか。この疑問に対しても、然りと答えることができるというのが私の考えである。というのは、簡単にいえば、二つの中世の復興は限定的であり、また一時的である。ルネサンスは総合的であり、また永久的である。¹³⁾」そしてその原因を彼はこう断定するのである。「イタリア・ルネサンスでは、古典の過去は一定の距離をおいて眺められたが、それは、まさにこのルネサンスのもっとも特徴的な発明、すなわち焦点遠近法における『眼と事物の距離』にたとえられるものである。焦点遠近法の場合と同様に、この距離が——理想的な『投影水平面』が介在するゆえに——直接の接触を不可能にしたが、総体的かつ合理的概観を可能にした。そのような距離は、二つの中世の復興には欠けている。¹⁴⁾」

ところでハスキンズの提唱した十二世紀ルネサンス説に対してこれまでどのような批判がなされてきたか、そしてまたそこではどのような問題点の指摘がおこなわれてきたかを逐一フォローするのは他に譲ることにしよう。それらを概観する作業は既に内外の研究者たちによって果たされており¹⁵⁾、ここでそれを繰り返してもさして意味のあることとも思えない。少なくとも現在の研究水準からいえば、ハスキンズの十二世紀ルネサンス論には修正ないし補足すべき点が幾多存在するということはもちろんありえても、その述語としての安定性は十分に確立されているといえるからである。そればかりではない。むしろもっと積極的にハスキンズの巨大な影響を受けて少なからぬ数の著書や論文が「十二世紀ルネサンス」の表題をもって書かれてきたのは周知のことに属する¹⁶⁾。従って、いま問題は十二世紀ルネサンス論云々にあるのではなく、十二世紀という時代にルネサンスと呼びうるほどの豊かな文化現象が開化していたとすれ

ば、それはどのような文化だったのかを確認することでなくてはならない。その点で、「ルネサンス」とは何かという概念論議にこだわっても、所詮それは不毛な結果に終わるだけだといったホイジンガの指摘は60年を経た現在においても、正当な見解であることに変わりはない¹⁷⁾。

西欧の十二世紀がまことに眼を見張るばかりの生彩に溢れた知的復興の時代であったことが学界レベルではもはや疑問の余地のないこととして認められているのをよく示しているのは過去30年ほどの間に少なくとも四つばかりのシンポジウムないしそれに準ずる企画が内外で開かれ、それがみな書物となって公刊されているという事実であろう。その四つとはまず1957年にアメリカのウィスコンシン大学で開かれたシンポジウム¹⁸⁾、次に1965年にフランスはノルマンディーのクータンス近郊スルジイ・ラ・サル（Sully-la-Chapelle）の城館でおこなわれたシンポジウム¹⁹⁾、三番目は1974年—75年にかけて東京のNHKで放映された「西欧精神の探究——革新の十二世紀」というタイトルの試み²⁰⁾、そして最後は1977年にアメリカのハーヴァード大学とカリフォルニア大学の共催のもとにマサチューセッツのケンブリッジで開かれたシンポジウムである²¹⁾。

注目すべきことはこれら四つのシンポジウムでいずれもハスキンスへの賛辞が表明されていることだ。例えば、最初のウィスコンシン大学主催のそれは4年後の1961年に書物にまとめられたが、その「序文」で編者は次のように述べている。「実際、そこ〔十二世紀〕には重大な復興、ルネサンスがあった——チャールズ・ホーマー・ハスキンスは正しかったのだ。フランスとイングランドの修道院および司教座聖堂学校において学問ある人々は中世人文主義の特徴たる宗教的であると同時に世俗的でもある方法でラテン語古典を読み、それを大切に心に刻んだ。アウグスティヌスの、新プラトンの古代哲学がシャルトル学派のなかに新しい根拠地と解釈を見いだした。パリではアリストテレスの論理学の研究がやがてあらゆる学問分野で実を結ぶことになる方法論を生み出した。シシリーとスペインでは西欧のキリスト教徒の学者たちが急速にラテン語に翻訳されていったアラビア語とギリシア語の訳で、イスラムの学問体系だけでなくアリストテレスと新プラトン哲学、そして医学、数学、天文学、自然科学にいたる古代ギリシアの学問体系をも学んだ。最後に、『市民法大全』

(*Corpus Juris Civilis*) において古代ローマ法がボローニャで完全に復活し、近代法学の基礎となった。古典の伝統のなかではギリシアの文芸はプラトンの『メノン』と『パイドン』および『ティマエウス』の一部を除いて十二世紀の西欧では知られていなかった。しかしギリシアの文献の直接的な知識は十五世紀を待たねばならなかったとしても、十二世紀は後のルネサンスの真の始まりであったし、古代の学問への関心の復活と広範な再発見のゆえにそれと直接的に結びつきえたのである。²²⁾」

ここに現代の十二世紀研究の水準の一端がほぼ示されていると思うが、参考までにもう一つ1977年のシンポジウムも覗いておきたい。これもハスキンズが十二世紀研究に与えた貢献の大きさを称賛する点では他の三つに劣らない。否むしろそれ以上であることはそもそもこのシンポジウムの開催された場所がハスキンズのゆかりの地——彼はそこで67年の生涯を終えた——であったことがなによりも雄弁に物語っていよう。これも5年後の1982年に大部の書物として刊行されたが、同じくその「序文」を編者はこう結んでいる。「彼〔ハスキンズ〕の『十二世紀ルネサンス』がこの時代に対する尽きない興味に十分応えていないといったとしても、ハスキンズを批判することにはならないであろう。我々の本にしたところで、彼の書物の二倍以上の分量があるのだが、その文化のすべての側面を扱うことはできないのだ。これらの考察はちょうどこの本の著者たちがハスキンズの見解を補足しようとしてきたのと同じように、未来の読者や研究者がこの本の成し遂げたものを修正し補足するだろうということを認める。というのも十二世紀——それは多くの意味で近代世界の始まりなのだが——が未来の学生を魅了するのをやめるとは思われなからだ。我々は彼らがこの時代に対する我々の描き方を変更するようないくつかの方法を推量することができるが、だからといって我々はハスキンズのルネサンスに関する百年記念研究集会の議題までここで予想するようなことはすべきでないと思う²³⁾」

さて、今世紀の十二世紀研究を通して見た十二世紀の問題性についてはこのあたりで一応締めくくっておきたい。いずれにせよ、ハスキンズによってその豊かな表情を表わし始めた十二世紀文化はおそらく今後ますます光彩を放ちながら私たちを魅了していくであろう。ある歴史家が巧みに表現したように、

西欧の十二世紀はそれを四季に喩えていうならば、長い冬の時代を耐えた人間精神がようやく大地に自由に伸びやかに呼吸をし始める春であった²⁴⁾。そうしてこの〈中世の春〉の日溜まりのなかにソールズベリのジョンがいたのである。

Ⅲ ソールズベリのジョンの生涯と著作

ジョンの生涯と経歴はどのようなものだったのだろうか。それに関しては彼自身が断片的に残している記録がある²⁵⁾。

彼はおそらく 1115 年から 1120 年の間に イングランド南部のソールズベリ (Salisbury) ——この地は遠く「古いサルム」 (Old Sarum) という意味のローマの地名からきている——近郊に生まれた。幼い頃から人並以上の知力を示し、将来教会のなかで有望な人材となりうる者と見なされていたようである。「少年時代に、この地の司祭から『詩編』を学んでいた。²⁶⁾」と彼は語っている。まもなく彼は勉学のためにフランスに赴く。1136年のことである。

「まだ少年であった私が、勉強するために初めてガリアに行った時（それは、イギリス人の輝かしい王、正義の獅子王ヘンリー〔一世〕が亡くなられた次の年〔一一三六年〕のことであった）、私は、当時サント＝ジュヌヴィエーヴの丘にいた、著名で誰からも敬服されていた教師であるパレの逍遙学派の徒〈アベラール〉のところへ赴いた。彼のもとで私は、弁証法の初歩的な基本を学び、夢中でむさぼるように、彼が述べるどんな言葉でも私の限られた能力のありったけを絞ってつかみとった²⁷⁾」

しかしこのアベラールはまもなく丘を去った。ジョンにとって「そのことはあまりにも早すぎると思えた」が、彼自身はなお二年の間、丘にとどまり、「最良の弁証論者と評判の高かった」アルベリクと「イングランド生まれ」のムランのロベールに弁証論を学んだ。その結果、「若気のいたりで軽率にも自分の知識を実際以上に過信」し、「呑みこみの早いことも手伝って」彼は自分

《君主の鑑》(7)

が「いっばしの少壮学者であるかのように思い込んでしまった。²⁸⁾」。だが彼はほどなく正気に立ちかえり、サント＝ジュヌヴィエーヴの丘を下ってシャルトルへ赴く。

「私はふと我にかえり、自分の能力〔の限界〕に気づき、助言を受け、師たちの好意によって、コンシェの文法学者<ギョーム>のところへ行き、彼の講義を三年間聞いた。そのあいだに学んだことは多く、私は永久にこの時のことを忘れないであらう。²⁹⁾」

こうしてジョンはパリとシャルトルで当時の優れた教師たちにさまざまな学問を学ぶことになる。即ち、「あらゆる知識の分野に通じ、言葉よりも心を、巧みさよりも知識を、虚栄よりも真実を、見かけよりも徳をもっていた」リシャール＝レヴェク、「諸学芸の最も勤勉な探究者³⁰⁾」ティエリ、「修辞学の師」ピエール＝エリ、「鋭い機知に富んだ、広い学問をもった」プティ＝ボンのアダム、「論理学と神学の師」ジルベール＝ド＝ポレ、「その生活も知識もともに推奨するに足る人物」ロベール＝プラン、「信頼のおける師」ボワシィのシモンといった学者たちである。これらの師たちのもとでの幅広い修学体験はジョンに若い日の客気を反省させ、<学問すること>の真の意味を教えたようである。彼はパリのサント＝ジュヌヴィエーヴの丘に在るかつての勉学仲間と再会するが、彼には彼らが相変わらずしがみついている弁証論が「他の学問研究を促進しはするけれども、もしそれがそれだけにとどまっているならば、血のかよわない不毛なものであり、それは他の学問から考えを得なければ、精神を活気づけて哲学の果実を生みはしない³¹⁾」ように思われた。ともあれ、

「こうしてさまざまな勉強をしているうちに十二年近くの歳月がたってしまった。³²⁾」

1136年に始まったジョンの修学時代に終止符が打たれ、彼の公人としての生活が開始されるのは1148年の春、教皇エウゲニウスⅢ世によってフランスのラ

ンスで開かれた教会会議への出席からである。おそらくその少し前からエウゲニウス三世治下の教皇庁との関わりがあったのであろうが、それはともかくこの教皇庁への出仕の経験はのちに彼の無著名の年代記『教皇史³³⁾』(*Historia Pontificalis*, 1164)として活かされることになる。1154年頃、彼は生まれ故郷のイングランドに戻り、カンタベリーの大司教テオバルトの秘書となる。これはクレルヴォーのベルナルのつよい推薦によることであったが、すでに1148年のランス公会議のさいベルナルはジョンをテオバルトに紹介しており、その後も折りにふれて彼を推薦し続けていたことがベルナルの「書簡」によって明らかになっている³⁴⁾。いずれにしても、テオバルトを中心とした「カンタベリー・サークル³⁵⁾」のなかに身を置いた彼はその豊かな学識と類い稀な実務能力を買われ、多くの重要な公的・外交的職務に従事させられることになった。

「私はアルプスを実に十回も越えた³⁶⁾」

ジョンはこういうが、当時彼はすでに老齢でつねに病気がちであった大司教テオバルトにとってなくてはならぬ人物であり、全権を委ねられた、テオバルトの分身 (*alter ego*) でさえあったのである。

「私の父であり、主であるカンタベリーの大司教テオバルトは深刻な病のもとにある。快方に向かうのか、もっと悪くなるのかわからない。彼はもはや以前のように職務を全うすることができないので、私にこの重い責任を委ねている。私の肩に彼は教会の仕事を監督するという背負い切れない重荷を背負わせた。³⁷⁾」

カンタベリー大司教の秘書としての身分が彼にもたらすこの激務は1161年にテオバルトが死去し、大司教職の後任にイングランド国王ヘンリー二世の大法官トマス・ベケット——このとき彼は同時にカンタベリーの福司教(司教座助祭)であった——が就いたのちも変わることはなかった。否むしろ大法官になる以前からのベケットの親しい相談相手であったジョンはそのことによって

ますます時代の公的文脈のなかにぬきさしならぬ形で組み込まれていかざるをえなかったといったほうがよい。アウグスティヌスの『神国論』以後の初めての政治論といわれる『ポリクラティクス³⁸⁾』(1159年)と中世最大の教育書と評される『メタロギコン³⁹⁾』(1159年)——この年に哲学的な性格をもつ詩集『エンテティクス⁴⁰⁾』(*Entheticus*)も書かれている——とがともに大司教就任前のほかならぬトマス・ベケットに献呈されているのはその意味で決して偶然ではない。のちに一層詳しく触れることにするが、前書はその原題——「ポリクラティクスあるいは宮廷人の愚行と哲学者の足跡について」(*Policraticus sive de nugis curialium et vestigiis philosophorum*)——が示すように、ヘンリーⅡ世の宮廷にはびこるさまざまな不道徳を厳しく糾弾するものとなっている。

いずれにせよ、ヘンリーⅡ世の大法官からカンタベリー大司教となったベケットが一転して「教会の自由」のために国王と決定的な対立関係に入ってしまったとき、ジョンもまた教会人として大司教派の立場に立たざるをえなかった。それが国王ヘンリーの不興を買わないはずはなく、ベケットに先んじて1164年の初頭フランスへの亡命を余儀なくされる。その地で彼は六年間追放の身を過ごすことになるが、そこでこうむり続けた彼の心の痛手がどれほど深く、つらいものであったか、は容易に想像がつく。彼はシャルトルとともに学び、いまはランスのサン＝レミ修道院の院長となっていたセルのピエール⁴¹⁾のもとに身を寄せるが、つぎに引用するのは亡命の初期にある友人へ宛てた彼の書簡の一節である。

「私自身についていえば、避けえないことは平静な心で耐える決意ができています。私には良心の痛みを感じることはありませんので、たとえ財産が奪われても、私に与えられた試練を喜び、神の施しに感謝することができます。不正や損失に苦しむことは私を悲しみで消耗させないとしても、友に会うことが許されず、善意の人々との愉快的会話の機会が失われ、私の義務を果たすべき手段も機会も拒否されるという……これは実に悲しいことです。これにも増して残念なのは教会の現状です。王の怒りが私の友人たちに及んでいるという知らせ

をほとんど毎日聞くにつけて、《私の心はふるえる》のです。……おそらく私の手紙を受け取ることも罪とされるのでありましょう。これを考えると手紙を書くことも憚れます。しかし神に誓って、たとえ友人たちが私を以前ほど愛してくれなくなったとしても、またたとえすっかり私に顔を背けるとしても、私が愛することを止めさせることは誰にもできません。⁴²⁾」

追放が解けて再びベケットに先んじてイングランドに帰ったジョンがベケットと国王との和解工作に奔走したことはよく知られている。しかしそれをつかの間のことで1170年の暮れも押し詰まった日、カンタベリー大聖堂内で帰国していたベケットは国王の四人の騎士によって暗殺されてしまう。このときジョンがベケットとともにいたことは確実であるが、そこからどのようにして脱出したかはよくわかっていない。その後殉教者ベケットの列聖に力を尽くした彼——彼はベケットのために『聖トマス伝⁴³⁾』(*Vita sancti Thomae*, 1171)を執筆している。なお同じく伝記に『聖アンセルムス伝⁴⁴⁾』(*Vita sancti Anselmi*, 1162)がある——は1176年にフランス王ルイ VII世と友人たちによって第二の故郷シャルトルの司教位にあげられ、四年間の司牧活動をおこなってその地で没した。1180年10月25日のことである。

IV シャルトルの司教座聖堂学校とシャルトル学派

ソールズベリーのジョンが十二世紀という歴史の舞台に記した足跡を大雑把に見ていけば、以上の通りである。私たちはここからどのようなことがわかるだろうか。

まず容易に気づくはずのことであるが、それはなんといってもイングランド生まれの彼が若い日に大陸にわたって実に12年間——即ち、1136年から47年まで——を北フランスの、主としてシャルトルにおいて修学のために費やしたという事実である。人生の自覚的な出発点である多感な青年時代がこのように異国での長期の勉学と研鑽によって占められたという事実はその後の彼の人生を大きく決定するほどのつよい意味をもったにちがいない。そして実際、私たち

はこの事実が彼の〈生〉と〈知〉の骨格を形成していたことをまもなく知ることになる。では、彼のこのシャルトル体験は一体、いかなる意味を彼に賦与したのだろうか。それを考えるためには、まず十二世紀という世紀のなかでシャルトルがどのような文化史的位置を占めていたかを見ておかねばならない。

ハスキンスによれば、中世における「知的中心地」は修道院、司教座聖堂、封建諸侯や国王の宮廷、都市および大学ということができ⁴⁵⁾、このうち中世前期にわたって長い間文化の要であった修道院が次第に衰退し始めるのにかわって登場してくるのが司教座聖堂であった。九世紀に広くおこなわれた改革によって司教座聖堂は独自の組織規範(カノン=教会典範)をもった独自の組織=司教座聖堂参事会に組織され、そこに属する聖職者つまり司教座聖堂参事会員は参事会長のもとに司教を選出する権限と聖職禄とを賦与されるようになった。こうして現実世界に力を得た司教座聖堂はそれ自体で一個の知的中心をなすほどに成長することになる。即ち、「この知的中心は豊かで勢力をもち、しばしば十分な教養をそなえていた。それはまた、常に農村に孤立していた大部分の修道院よりも都市共同体のなかに安定した地位を築いていた。司教座聖堂の蔵書、司教座聖堂学校、司教座聖堂の古文書、司教たちの事績録(*gesta*)、司教座聖堂参事会員の著作、司教裁治権、司教による学問の保護奨励などが、一方では修道院の時代、他方では諸君主の宮廷の時代にはさまれたこの時期に、大きな役割を果たしたのである。⁴⁵⁾」

ソールズベリのジョンが勉学に明け暮れた青春時代の12年の大半を過ごしたシャルトルはまさにこうした司教座聖堂の所在地の一つであった。そればかりでなく、そのシャルトルの司教座聖堂の付属学校こそはそもそも当時それらの集中する北フランスのなかでもオルレアン、ランス、ラン、パリとならび、否それらを凌駕する当代随一の古典復興の場として際立っていたのである。ここでは「ラテン作家たちの、特にラテン詩人たちの広範な読解、さらには註釈、文法と修辭学の活発な研究や習熟」がおこなわれ、「大量に作られた優れたラテン散文やラテン詩」のなかには「古代人の特質や感情がこめられて⁴⁷⁾」いた。若き日のジョンはこういうシャルトルの文芸の学校で活躍する優れたマギストル(教師)たちを憧憬をもって見つめ、その空気を胸一杯吸おうとして

いたにちがいない。

「シャルトルのベルナールはわれわれをよく巨人の肩に乗っている小人になぞらえたものであった。われわれは彼らよりもより多く、より遠くまで見ることができる。しかしそれはわれわれの視力が鋭いからではなく、あるいはわれわれの背丈が高いからでもなく、われわれが巨人の身体で上に高く持ち上げられているからだ、と彼は指摘していた。私もまったくその通りだと思う。⁴⁸⁾」

これはシャルトルの学校に集う一群の学者たち、いわゆるシャルトル学派の総帥として知られるベルナルの語った言葉として後年、ソールズベリのジョンが伝えているあまりにも有名な一節であるが、いまこの言葉の真の意味をめぐっての細かな論議はさておき⁴⁹⁾、私たちはここにシャルトル学派のもっていた基本的な精神のあり方を端的に看とることができる。即ち、彼らにとって過去(古代)とは彼ら(現代)によって二倍もなく否定されるべき対象ではない。それどころか、彼ら現代人は偉大な過去という「巨人の肩に乗っている小人」(*nanos gigantium humeris insidentes*)——原文は「巨人」も「小人」も複数形であることに注意されたい——にすぎないのであって、その「巨人たち」(*gigantes*)のおかげで「小人たち」(*nani*)たる自分たち現代人でも文字通り「彼らよりもより多く、より遠くまで見ることができる」(*possimus plura eis et remota uidere*)。それは決して自分たちの「視力が鋭いから」(*proprii visus acumine*)でも、「背丈が高いから」(*eminentia corporis*)でもないというのである。

クリバンスキーが指摘しているように、私たちはこういう比喻のうちにシャルトル学派にとっての古代と現代との関係が見事に表現されているのを見ることができる。つまりここには古代人の知恵と古代の崇高な遺産への尊敬が込められていると同時に、他方においてそうした遺産を自分のものとし、それを増大させている限り、自分たちはより優れた者たりうるとする堅い確信も窺われる⁵⁰⁾。彼らシャルトル学派にとって、古典研究の意味はこういうものであったが、シャルトルのベルナルの語ったこの「巨人と小人」の比喻を紹介してい

るソールズベリのジョンにとってもまた古典を学ぶことの意味はまさにここにあったのである⁵¹⁾。

さてそうだとすれば、この古典の学習や研究は基本的に長く忍耐のいる作業を伴わずにはおかないはずだ。ことにラテン語古典を正確に講読することができるためにはまずラテン語文法の徹底した訓練が要求される。十二世紀のシャルトルの学校ではこの文法がきわめて重視されていたが、これに関してもベルナルがおこなっていた文法の教授方法をいまに伝えるジョンの記述がある。

「シャルトルのベルナルは、近年のガリアにおける文学研究の豊かな泉であるが、次のような方法で文法を教えるのが常であった。彼は著作者たちの作品を読む場合、平易なもの、一般的規則に従うものを指摘した。他方で彼は、文法的姿詞、詭弁的こじつけを明らかにし、彼自身の行う授業が他の教科とどのような関係をもっているかを説明した。……また訓練は記憶力を高め、機知を鋭くするので、彼は、生徒たちに、読んで聞かせたことを模倣する練習をさせるようあらゆる努力を傾けたが、時にはある者に注意を与え、ある者には鞭打ちや罰を与えた。誰もが毎日、前の日に聞いたことの一部を、ある者は多く、ある者は少なく、暗唱するよう求められた。というのも、彼らにとって翌日は前の日の弟子であったからである。デークリナーツィオーと呼ばれる夕方の訓練で、生徒たちは非常に多くの文法を詰めこまれたので、それをまる一年間行った者は、ひどく頭が悪くない限り、話したり書く方法を自由に使いこなすようになり、一般に用いられている表現の意味を会得せずにはいなかった。……彼は、散文や詩文を模倣する初歩的練習で、少年たちに手本として役立つ詩人や弁論家たちの作品にも説明を与えた。そして、こうした人々の足跡をみならうように命じ、彼らの言葉の組み合わせや言い回しの美しさを指摘した。⁵²⁾」

このようにシャルトルの司教座聖堂学校では基礎的な文法の徹底的な習得を通して古典学芸の復興が他のいかなる学校よりも目覚ましくおこなわれていた。若いソールズベリのジョンもまたここに窺われるような息の長い、基礎的で地道な学習に耐えてその人文主義的な教養を磨いていった。ハスキンスはこ

うしたジョンを「シャルトルの学校が生んだ最も豊かな成果⁵³⁾」といい、R・L・プールは「古典の読解の広さと深さという点ではどんな中世の作家も彼と肩を並べられる者はいなかった⁵⁴⁾」という。そしてさらにホイジンガはジョンの文体を後代の人文主義者の文体に優るとして次のようにいっている。「そこには、きどった言い回しや、あるいは長ったらしい学識ばった文章はなく、誇張されてもいません。簡潔で明確です。短い章句、単純明解な用語、生き生きと力強く、人をひきつけてはなさない文体、それは莊重で、しかも明るくユーモアに富んでいます。彼は誇張を憎みました。⁵⁵⁾」

ところでしかしながら、こうしたシャルトルの司教座聖堂学校やそこを牙城として十二世紀人文主義を開花させたシャルトル学派の学問の隆盛は決して長続きはしなかった。それが命脈を保ちえていたのは実はこの世紀の半ばまでのことである。一つにはての学派の有力なマギステルたち、シャルトルのベルナールはいうに及ばず、例えばコンジェのギョーム、シャルトルのティエリ、ジルベール＝ド＝ポレといった学者たちが既に1150年前後に世を去っていたという事情がある⁵⁶⁾。また一つにはたとえ十二世紀の自由な知的雰囲気の中なかでさえ異教の古典的著作に対する本能的な嫌悪と猜疑の感情が保守的な聖職者層の間に広く存在したことも否定できない⁵⁷⁾。だがこの学派の古典重視やその人文主義が衰退していったのはなにもそれだけではなかった。この世紀の中葉に時代の振り子はシャルトルからパリへ大きく動いていた。そこでは古典への深い沈潜や文芸のゆとりある学習によって育まれた広い人文主義的教養は既に時代遅れのものになろうとしていた。のちに触れることになるが、ソールズベリのジョンが生涯の敵とした「コルニフィキウス (*Cornificius*) の徒」やソフィストの弁証論者に代表されるような速成の、技術主義的な教育で満足し、実利のみで走ったり、反対に不毛な論議を自己目的とするような風潮が幅を利かせ始めていたのである。こうしてシャルトルの司教座聖堂学校 (*schola*) の命名は新しく台頭してきたパリの「大学」(*Universitas*) に席を譲ることになる⁵⁸⁾。イギリスの歴史家サザーンが形容したように、時代は「修辞から論理⁵⁹⁾」へと大きな精神転換を果たそうとしていた。

V ソールズベリのジョンの学芸・教育論

ソールズベリのジョンに「中世教育学の基本論文⁶⁰⁾」(C. S. Baldwin)にして「教育理論史の古典⁶¹⁾」(D. D. McGarry)といわれる『メタロギコン』(1159年)の執筆を促したのはしたがって、このような時代の浅薄な風潮(と彼には思われた)に対するつよい嫌悪と抗議の感情であったにちがいない。実際、私たちはこの書物のなかに次のような彼の痛烈な発言を見いだすとき、彼にとって真に学ぶとは一体いかなることなのか、を突き詰めて問うことが最大の関心事だったのを知ることができる。

「コルニフィキウスが高額の報酬で雇われ、長い間にわたって得々と弁じていながら、信じやすい聴講者たちに何も教えてこなかったといっても、私は全然驚きはしない。というのもそれは彼自身が自分の師たちによって同じように『教えられなかった』からだ。雄弁などというよりはむしろ冗長なだけで、彼はただ意味の果実を欠いている言の葉を風に向かって撒き散らし続けているだけだ。一方では彼は人の言うことをその人が誰であろうとお構いなしに、ただただ自分の意見を正当化し、他人の意見を打ち負かそうとしていぎたなく責め立てる。それでいて他方では彼はうまく立ち回って掴み合いの喧嘩になるのを避け、自分の主張を理性のうえに置き、聖書にしたがってともに歩もうとすることを忌避するのである。⁶²⁾」

ここに登場するコルニフィキウス(Cornificius)なる人物が具体的には一体誰のことを指しているのかは実はよくわかっていない⁶³⁾。しかしジョンが『メタロギコン』で批判しようとしていたのはたんに一コルニフィキウスではなく、教師であれ同僚であれ、聖職者であれ修道士であれ、ともかくこのコルニフィキウスに追随している一群の者たち——ジョンは彼らを「コルニフィキウスの徒(secta)」と呼ぶ——であったので、この人物の詮索はさして意味があるとは思われない。それよりもジョンの眼には時代の悪しき風潮を代表してい

るように映っていたこのコルニフィキウスの徒の一般的特徴は一体どんなものなのだったのだろうか。

ジョンの描くところによれば、例えば彼らは学芸を真面目に学ぶ気持ちなどさらさらなくエロクエンティア（表現＝雄弁術）や文法を学習する意義など端から認めようとしない。彼はそれをこういつて嘆く。

「エロクエンティア(*eloquentia*)を学ぶことを否定する者の本当の狙いは何なのか。それはちょうど盲(*caecus*)でなければ、ものが見え、つんぼ(*surdus*)でなければ、ものが聞こえるように、啞(*mutus*)でなければ、生まれつき人間に備わっているなどと主張する者の本当の狙いは何なのだろう。⁶⁴⁾」

言葉は人間の「生来の能力」なのだから、学ぶ必要はない、とするコルニフィキウスの徒にしてみれば、地道で忍耐のいる努力を通して学知の修得に志することなどナンセンスの極みということになるだろう。即ち、彼らは「怠惰であって、叡知の所有者であるよりは、そうであるように思われることを望んでいる⁶⁵⁾」にすぎないのである。

そればかりではない。彼らのなかにはあろうことか学芸を営利事業とみなす者まででる始末なのである。

「彼らにはたった一つのことしか関心がない。『できれば公正な手段で、それがだめなら、どんな手段でもいいから金(*pecunia*)をもうけること』である。……叡知の果実は彼らにとっては富(*opes*)しかないのだ。……⁶⁶⁾」

そしてこのような風潮はひとりコルニフィキウスの徒だけの話ではなかった。ジョンの鋭い批判の眼は次のような実りのない、空虚な詭弁術に耽る「ソフィスト的弁証論者」たちにも向けられた。

「この時代の哲学者たちはだらだらとこんな問題について論じあっていた。市場に曳かれて行く豚(*porcus*)は人(*homo*)が引いているのか、それとも

綱 (*funiculus*) が引いているのか、そしてまたマント (*capucium*) を買う人は同時にフード〔頭巾〕(*cappa*) も買うのかと。⁶⁷⁾

さて、これが十二世紀中葉の世界において知的であるべき人間たちの真の姿であり、ジョンの眼に映っていたコルニフィキウスの徒やソフィスト的弁証論者の生態にはかならなかった。青春の十二年間を文字通り諸学芸の修得のために費やした彼にとって、こうした学問の世界の現状と人間模様は到底容認しうるものではなかった。くどいようだが、長い年月をかけて忍耐づくろく学ばねばならぬ基礎的な自由学芸——いうまでもなく、中世ではそれは文法・修辞学・弁証論の「三学」(*trivium*) と、算術・音楽・幾何・天文の「四科」(*quadrivium*) の「自由七科」(*septem artes liberales*) からなっていたわけだが——人と文教育を鼻でせせら笑い、ごく短期間の、速成の教育で専門知識を修得すれば足りると公言して憚らない彼らのあまりにも技術主義的な学問・教育観は彼の学んできたその、まさに対極にあったといっていいい⁶⁸⁾。それゆえ、彼にとって、もはや事態は落ちるところまで落ちたと見えるほどの深刻さを呈していたのである。

「見よ、あらゆるものの一切が『取り替えられて』しまった。文法は完全に作り変えられた。論理学は改められた。修辞学は軽蔑された。⁶⁹⁾」

では、こういう深刻な認識を示したジョンは『メタロギコン』のなかで一体どのような学問と教育についての考えを披瀝しているのだろうか。全四巻全九七章からなるこの書物⁷⁰⁾は当然のことながらそのなかにさまざまな問題を含んでおり、それらの逐一について解説めいたことをするのがここでの直接の課題ではない。中世学芸史のうえで『メタロギコン』のもつ豊かな問題性に関しての研究は既に内外の研究者によって相当程度果たされている⁷¹⁾。それゆえいま私たちの当面の課題に限ってこの書物をみることになるが、そうした観点から見るとき、私たちはそこに何を読みとることができるのだろうか。

「私はこの論稿のなかに意識して倫理 (*mos*) に関する若干の考察を織り込

んだ。というのは読まれること、書かれてあることのすべてはそれが何か人生の支えにならないならば、無益であると確信しているからである。そしてすべての哲学的見解もそれが徳の涵養や生の営みのなかに関連をもたなければ、無益であり偽りだと思ふからである。⁷²⁾」

これは『メタロギコン』の冒頭の「序文」でジョンが語っている言葉であるが、私はここに彼の思想の核心中の核心が示されていると思う。即ち、およそすべての学芸(*artes*)——「読まれること、書かれてあることのすべて」(*omnia que leguntur aut scribuntur*)——はそれが人間の生の基本的あり方に関係する——「人生のささえ」(*adminiculum vitae*)——ときに初めて意味をもつ。具体的にはそれは「徳の涵養」(*cultus virtutis*)ということになるが、そういう人の生と深いところでの結び付き——「生の営み」(*vitae exhibitio*)——を欠く学芸などそもそも学芸の名に値しない。彼はそういつているわけであろう。このように、ジョンにとって学芸修得の究極の意味はそれを通して人間が「徳」(*virtus*)という「人生の営み」における最高の倫理的価値へと近づいていくことにあったといっている。そしてそうであればこそ、彼にとっておよそその学芸の基点にはかならず「言葉」(*verbum*)とは何か、という問題は抜き差しならぬ意味をもっていたのである。そのことはそもそも『メタロギコン』という書物それ自体のうちに明らかである。

即ち、彼が「序文」で自ら語っているように、『メタロギコン』は論理学擁護の書——つまり、「メタ(*μετα*)」(*about for or on behalf of*) + 「ロギコン(*λογικόν*)」(*logic or logical studies*) の意⁷³⁾であるが、この場合この論理学(*logica*)とは狭義には論証の理論として弁証論(*dialectica*)を指し、広義には表現と論証の理論として「自由七科」のうちの文法(*grammatica*)・修辞学(*rhetorica*)・弁証論の「三学」と同義であり、一般的に「言葉に関する理論⁷⁴⁾」を意味しているのである。全四巻の構成をみると、第一巻が文法、第二巻以降が弁証論を扱っているが、「すべての自由学芸の出発点⁷⁵⁾」(*origo omnium liberalium disciplinarum*)にして「すべての研究の母と乳母⁷⁶⁾」(*mater et alatrix studii sui*)であり、「正しく語り書くことの学⁷⁷⁾」(*scientia recte*

loquendi scribendique) たる文法に習熟しなくては「真偽を弁別し、いかなる論法が論争において確固たる証明となりうるか、いかなる論法が説得力をもつか⁷⁸⁾」を教える弁証論の修得もおぼつかないという。彼はそういう見地に立って両者の重要性を説いていくのであるが、いずれにしてもこのように彼にとっては、言葉は「理性」(*ratio*) とともにそれが人間をたんなる動物から区別する人間の基本的能力で⁷⁹⁾あるがゆえに、そうしてまたそれが人間の社会的性格を形成しているが⁸⁰⁾ゆえに、重大視されている。しかもこの理性と言葉との関係は彼には、次のように認識されていた。

「知 (*scientia*) と徳 (*virtus*) の生みの親 (*parens altrix*) であり保護者 (*custos*) である理性はしばしば言葉 (*verbum*) から発想を得て、言葉を通じてより実り豊かな成果を産むのである。⁸¹⁾」

このように、ジョンにあっては言葉から理性へ、そして理性から知さらには徳へと学芸修得の段階と目的が想定されていることがわかるが、このことは逆にいえば、「言葉」——それをコルニフィキウスの徒は人間の生来の能力だから学ぶ必要がない、とうそぶいていたわけであるが——というものがたんに疎かにされてはならないものであると考えられているだけでなく、もっと積極的にそれをきちんとした基礎的習練——つまり、文法と修辞学と弁証論の修得——を経てマスターしない限り、人間にとって本当に生きたものとはなりえないとつよく考えられていたことを意味していよう。なぜなら彼にとって、言葉なしには人間の思考や思索はありえず、それらはまた言葉によって表現を与えられなければ、思想として自己を表出させるわけにはいかないからである。即ち、

「言葉の使用によって進まない理性は脆弱であるだけでなく、ある意味では不具でもあるのだ。⁸²⁾」

この学芸修得の段階を教育の実現過程とみたときに、ジョンの教育哲学の輪郭がはっきりと浮かび上がってくるのはこの文脈においてである。マクガリー

が指摘しているように⁸³⁾、ジョンにとって教育の目的はまずもって人間理性の開発にあるが、理性は真理 (*veritas*) の探究をその目的としなければ、何の目的もないことになる。つまり、この真理の探究が理性を媒介とする教育の目的ということになるが、その真理認識は次のような三つの段階、即ち(1)感覚と想像力から派生する意見 (*opinio*)、(2)理性にもとづく学知 (*scientia*)、(3)知解によって得られる叡知 (*sapientia*) に区分される。そうしてこの三段階を経て「叡知」が獲得されたとき、「真理」の完全な理解が達成されることになる。したがって、教育の最高目的はたんなる学知の修得を超えて、この叡知の獲得を目指さねばならないのである。

「あらゆることのなかで最も望ましいことは叡知 (*sapientia*) であり、その果実は善性への愛 (*amor boni*) と徳の涵養 (*virtutis cultus*) である。それゆえ精神は叡知の探究に向かわねばならず、個々の場合に正しい判断 (*incorruptum iudicium*) ができるように十分に究めねばならない。⁸⁴⁾」

さて、ソールズベリのジョンにとって学芸＝教育の究極目的が個々の学科 (*ars*) のたんなる修得にあるのではなく、それら諸学芸 (*artes*) の修得から得られる学知を超えて、人間として叡知を求めること、いいかえれば物事に対する正しい判断を誤ることなく下せるような高い識見を身につけた人格を養うことにあったことはもはや明らかである。マクガリーはこういうジョンの教育哲学を “*idealistic*”——“*materialistic*”, “*pragmatic*” に対して——とし、彼を “*Idealist*” と呼んでいるが⁸⁵⁾、確かにそこに一貫して窺われるのはたんなる知育を超えた徳育の強調であり、人格の陶冶の強調であるという点で間違いなく “*idealistic*” な教育哲学とみなしていいにちがいない。

VI むすび——ソールズベリのジョンにおける＜人文主義＞の意味

ところで既に了解されるように、こういう教育＝学芸観の骨格を形成しているのは彼の古典へのつよい思い入れであり、その点を捉えて彼はしばしばペト

《君主の鑑》(7)

ラルカ以前の中世人文主義の代表者と目されてきた⁸⁶⁾。実際、『メタロギコン』——のちに見るように、『ポリクラティクス』においても同様に——のなかに登場する古典著作家たちは異教徒、キリスト教徒を問わず、まことに膨大な数に上っており、その引用の多さ一つをとっても彼の古典に対する造詣の深さと広さが並のものではないことが窺われる⁸⁷⁾。

ジョンの研究史において、彼がこうした古典に対する驚嘆すべき該博な知識をもった中世人文主義者の典型であるとする評価はひさしく異議を差し挟まれないできた。しかし1950年のリューベシュツによる本格的なジョン研究や⁸⁸⁾1970年のサザーンの人文主義の歴史研究⁸⁹⁾公刊以降、その評価に一定の批判が加えられているのは周知のことであろう。いまそれらの批判の逐一について十分に検討する余裕はない。実は、それは私たちにとっての本来の課題である『ポリクラティクス』の検討にとって避けて通れぬ、不可欠な問題であるので、次の機会に触れることにしたい。ここではとりあえず、その批判の根拠と文脈がほぼ二つの点、即ち(1)ジョンの古典に対する捉え方とその引用の仕方の問題性、(2)ジョンの属したシャルトル学派への疑問と中世「人文主義」の問題性、に集約されるものであることを確認しておくだけにしよう。

だがそうした批判にもかかわらず、ジョンが十二世紀を代表する人文主義者であるとする基本評価は大筋において承認されていることは確かである。それは一体、どういう意味においてであろうか。

イギリスの中世史家、D・ノウルズによれば、「深い、共感に満ちた人文主義」(*deep and sympathetic Humanism*)が西欧中世に開花したのは1070年から1130年にかけてのことで、その後この人文主義は衰微することになるが、そこに見られる独自の特徴は次の三点に要約できるといふ。即ち、(1)古典に対する繊細な感覚があって、人文主義者たち(ペトルス・ダミアニ、アンセルムス、アベラール、尊者ピエール、ソールズベリのジョンら)は古典文芸の教養に基づいて自由で、伸びやかで、品格のある文章表現を身につけていた。(2)彼らは自分たちの時代よりも古代を偉大視し、古代の偉人・賢者に対して全人的な崇敬を払い、その生のあり方に倣おうとした。(3)古代に対する親近感と共感を共にする友人たちとの友愛に基づく集団の経験や討論を大切にし、日常の生

活を徳の実践として受けとめた、という点である⁹⁰⁾。

さて、ここに挙げられている人文主義の特徴点がまさにジョンの場合に当てはまることはこれまでの叙述から明らかであろう。シャルトルのベルナルの言葉として彼が紹介している、「巨人の肩に乗っている小人」の譬えが如実に示すように、彼にとって自分たち現代人は古代の人々よりも「より多く、より遠くまで見ることができる」といっても、それは自分たち自身の「視力」や「背丈の高さ」によるのではなく、巨人たる古代人の偉大さの上に乗っているからであった。

「われわれの世代はわれわれに先立ったものによって受け継がれた遺産を享受している。われわれはしばしば以前の人々よりもより多くのことを知っているが、それはわれわれが自分たち自身のもって生まれた能力によって進歩したからではなく、他者の力によって支えられ、祖先から受け継いだ富をもっているからにすぎない。⁹¹⁾」

ソールズベリのジョンにとって、古代の学芸＝古典はしたがって単なる過去の遺物では毛頭なかった。それは現にいまも生きている価値ある知的遺産であり、それなくしては到底自分たち現代人が生きて生けない生の規範とさえ考えられた。そうしてそれを優れた教材として先人たちの叡知を心静かに、地道に、時間をかけて学習・習得すること、いいかえれば人文教育の必要性を彼はつよく求めた。そういう全人的教育の道筋のなかにおいてはじめて豊かな感性と高い識見を兼ね備えた人間ができあがる、そう彼は考えたのである。

それゆえ、ジョンのこのような思想のまさに対極にあるコルニフィキウスの徒やソフィスト的弁証論者たちを叩く狙いをもって書かれた『メタロギコン』のなかで彼がなによりも熱心に問いかつ説いたのが「言葉」(*verbum*)＝「表現(エロクエンティア)」(*eloquentia*)の問題であったことは別段驚くにあたらない。実利にのみ関心を注ぎ、基礎的な人文教育を抜きにして狭い専門知識を速成の学習によって身につけることで満足する彼らにとって、言葉など人間に生来備わっている能力であり、改めて学ぶ必要のないものであった。しかし私

《君主の鑑》(7)

たちが見てきたように、ジョンにとっては言葉こそはたんなる動物とは異なっており社会的存在である人間がそれを出発点として「理性」(*ratio*)を研ぎ、その理性が「学知」(*scientia*)を求め、学知がさらに「真理」(*veritas*)の認識能力たる「叡知」(*sapientia*)へと進んで、ついには「徳」(*virtus*)の完成へと至る人間の人格形成過程における最も根源的な能力であったがゆえに決して疎かにされてはならないものだったのである。

とまれ、このようにあくまでも言葉にこだわり、言葉に身を寄せて古典の精神を自己のものにすること、ここにジョンの人文主義の核心があった。それはしかし彼の生きた十二世紀の中葉においては、やがて省みられなくなるはずのゆとりある自由学芸の学習・教育システムによってはじめて培われるものであった。時代の趨勢はこのジョンの願いと正反対の方向に向かい、「理性の照らさないエロクエンティア(表現)⁹²⁾」(*eloquentia, quam ratio non illustrat*)、「叡知をともしないエロクエンティア⁹³⁾」(*eloquentia sine sapientia*)万能の風潮へと流されていく。だがその流れに竿さすことを潔しとしないジョンの人文主義はたんに学問や文芸の知的世界にのみ向けられたのではなかった。徳の涵養と人格の完成を究極目的とする幅広い彼の人文主義的教養と教育の理念は本来、人の上に立って人を正しく統治することを要請されていたはずの君主や貴族たちの退廃した生活振りに対しても同様に向けられていた。いうまでもなく、『メタロギコン』執筆の同年、しかも『メタロギコン』よりも一カ月あまり前に脱稿していた『ポリクラティクス』がそれである。

6 十二世紀ルネサンスとソールズベリのジョン

〔注〕

- 1) Patricia J. Eberle, "Mirror of Princes", in *Dictionary of The Middle Ages*, Charles Scribners Son, vol. 8, 1987, p. 435.
- 2) 例えば, W. Berges, *Die Fürstenspiegel des hohen und Späten Mittelalters*, Hiersemann, 1938. また L. K. Born は13世紀と14世紀の《君主の鑑》を扱った論文をとくに12世紀のジョンを論じることから始めている。L. K. Born, "The Perfect Prince: A Study in Thirteenth and Fourteenth-Century Ideals", *Speculum*, vol. III (1928), pp. 470-504.
- 3) R. L. Pool, *Illustrations of The History of Medieval Thought and Learning*, London, 1920, (First Published in 1884), p. 175.

- 4) C. C. J. Webb, *John of Salisbury*, London, 1932, p. vi.
- 5) ホイジンガ, 里見元一郎訳「前ゴシック精神の人ソールズベリのジョン」(『文化史の課題』東海大学出版会, 1965年) 118頁。『ホイジンガ全集』河出書房, 1971年。] なおこれは1933年4月21日にライデン大学でおこなわれた講演である。
- 6) Hans Liebeschütz, *Medieval Humanism in The Life and Writings of John of Salisbury*, London, 1950, p. 1.
- 7) Janet Coleman, "John of Salisbury", in David Miller ed., *The Blackwell Encyclopaedia of Political Thought*, 1987 p. 256.
- 8) ハスキンズ, 野口洋二訳『十二世紀ルネサンス』創文社, 1985年, iii頁。〔別宮貞徳・朝倉文市訳『十二世紀ルネサンス』みすず書房, 1989年。〕
- 9) そもそも15・16世紀のルネサンスに先立って中世に何らかのルネサンスがあったという考え方や「十二世紀ルネサンス」というタームの使用もハスキンズ自身が「かつて十五世紀のイタリア・ルネサンスに対してもっぱら用いられていた用語にならって、便宜上、一般に、カロリング・ルネサンス, オットー・ルネサンス, 十二世紀ルネサンスと呼ばれてきた。」(前掲, 野口訳, 4頁)と述べているように、すでに19世紀から存在した。ちなみにハスキンズ以前に, D. C. Munro, *The Renaissance of the Twelfth Century*, Annual report of the American Historical Association for Year 1906, Washington 1908. があること, ハスキンズから6年後に G. Pare, A. Brunet, P. Tremblay, *La renaissance du XII^e siècle: Les écoles et L'enseignement*, Paris, 1933. がでていることも知っておいていいことであろう。より詳しくは後注(15)の文献を参照されたい。
- 10) ハスキンズ, 前掲書, 5頁。
- 11) William A. Nitze, "The So-Called Twelfth Century Renaissance", *Speculum* vol. XXIII, no. 3, 1948, P. 471.
- 12) *ibid.*, p. 470.
- 13) パノフスキー, 中森義宗・清水忠訳『ルネサンスの春』思索社, 1973年, 124頁。
- 14) 同, 127頁。
- 15) この問題に関して Stephen C. Ferruolo, "The Twelfth-Century Renaissance", in Warren Treadgold ed., *Renaissances before the Renaissance*, Stanford University Press, 1984. がすぐれた概観を提供している。わが国では戦前に既に中川一男「中世思想のルネサンス的傾向について(七)十二世紀ルネサンス説について」(『西洋中世史新論』1942年)があるが, 戦後では一番早く本格的に「十二世紀ルネサンス」についてとりあげたのは, おそらく兼岩正夫氏であろう。「十二世紀のルネサンス」(『歴史教育』第2巻第8号, 1954年), 「十二世紀の問題——所謂『十二世紀ルネサンス』とその批判をめぐって」(『西洋史学』XXVⅢ, 1956年), 「歴史概念としての『十二世紀ルネサンス』の安定性」(『歴史教育』第14巻第7号, 1966年)。また前掲のハスキンズ『十二世紀ルネサンス』(野口洋二訳)のなかの野口氏の「訳者あとがき」がこの問題に対する懇切な解説をおこなっていてきわめて有益である。もう一つの邦訳の「解説」(朝倉氏)も参照されたい。
- 16) 例えば, C. Brook, *The Twelfth-Century Renaissance*, London, 1969. C. W. Hollister, ed., *The Twelfth-Century Renaissance*, New York, 1969. C. R. Young, ed., *The Twelfth-Century Renaissance*, Holt, Sinhart & Winston,

《君主の鑑》(7)

1969. S. R. Packard, *12th Century Europe, An Interpretive Essay*, Amherst, 1973. など。
- 17) ホイジンガ, 前掲論文。
- 18) *Twelfth-Century Europe and The Foundations of Modern Society*, ed., by Marshall Clagett, Gains Post, Robert Reynolds, The University of Wisconsin Press, 1966.
- 19) *Entretiens sur la Renaissance du 12e siècle*, sous la direction de Maurice de Gandillac et Eduard Jeaneau, Paris, 1968.
- 20) 堀米庸三編『西欧精神の探求——革新の十二世紀』日本放送協会, 1976年。——なお以上三つのシンポジウムについては, 堀越孝一氏による簡単な紹介がある。堀越孝一「十二世紀中世について——三つのシンポジウム」(『学習院史学』第13号, 1977年。)
- 21) *Renaissance and Renewal in the Twelfth Century*, ed. by R. L. Benson and G. Constable, Harvard Up, 1982.
- 22) *Twelfth-Century Europe and The Foundations of Modern Society*, *op. cit.*, pp. v-vi.
- 23) *Renaissance and Renewal in the Twelfth Century*, *op. cit.*, p. xxx.
- 24) Josef R. Strayer, *Western Europe in the Middle Ages*, Appleton-Century-Crofts, 1955. p. 143. ここでストレーヤーは12世紀を「中世文明の春」と呼んでいる。またわが国の柏木英彦氏の代表的著作は『中世の春——十二世紀ルネサンス』(創文社, 1976年)という表題をもっていることに留意されたい。
- 25) ジョンは自分の経歴について、『ポリクラティクス』(*Policraticus*)と『メタロギコン』(*Metalogicon*)で断片的に語っている。
- ここで彼のこの主要著作について一言しておきたい。彼の著作は現在そのほとんどが校訂されている。まとまった版としては J. A. Giles(ed.), *Ioannis Saresberien-sis postea episcopi carnotensis, Opera Omnia*, 5, vols, London, 1848 (repr. Leipzig, 1964): Migne (ed.), *PL*(1855)CXCIX, 1-1040. がある。
- このうち『ポリクラティクス』についてはここでは, C. C. J. Webb(ed.), *Ioannis Salisberiensis Policraticus, sive de nugis curialium et vestigiis Philosophorum libri VIII*, 2 vols, Oxford, 1909(repr. Frankfurt a. M., 1965). を使用した。
- また『メタロギコン』については, C. C. J. Webb(ed.), *Ioannis Saresberiensis Metalogicon libri IIII*, Oxford, 1929. を使用した。
- なお前者には全訳ではないが, J. B. Dickinson (trans. with an introduction), *The Statesman's Book of John of Salisbury. Being the Fourth, Fifth, and Sixth Book, and Selection's from the Seventh and Eighth Books, of the Policraticus*, New York, 1927 (repr. 1963). J. B. Pike (trans.), *Frivolities of Courtiers and Footprints of Philosophers. Being the First, Second, and Third Books, and Selections from the Seventh and Eighth Books of the Policraticus*, Minneapolis, 1938 (repr. New York, 1972). Cary J. Nederman (edi. and trans.), *Policraticus, of the Frivolities of Courtiers and the Footprints of Philosophers*, Cambridge University Press, 1990 がある。
- 後者には D. D. McGarry(trans.), *The Metalogicon of John of Salisbury. A Twelfth-Century Defense of the Verbal and Logical Arts of the Trivium*,

Los Angeles, 1955(repr. 1971). がある。ともに適宜大いに参考にした。

また彼の生涯については, Carl Schaarschmidt, *Johannes Saresberiensis nach Leben und Studien, Schriften und Philosophie*, Leipzig, 1862. 以来, 種々の研究書やテキストの各現代語訳に断片的に載っているが, C. C. J. Webb, *John of Salisbury*, London, 1932 (repr. New York, 1971), chap. I & IV. R. L. Poole, "John", in *The Dictionary of National Biography*, Oxford University Press, vol. IX & X, 1908-1913, pp. 876-883. が依然として有用であろう。

26) *Policraticus*, II, 28.

27) *Metalogicon*, II, 10. なお, ジョンが自分の修学時代(1136-47)を振り返って語っているこの有名な箇所は早くから研究者によって注目されてきた。ハスキンスも『十二世紀ルネサンス』でこの箇所をほぼ全文引用している。それゆえ以下, 本稿で「」の形で引用されているジョンの言葉は一部を除き基本的に野口訳から拝借した。

28) *ibid.*, II, 10.

29) *ibid.*, II, 10. ところで, このサント=ジュスヴィエーヴの丘を下ってコンシエのギョームのもとに行ったという記述においては, 実はジョンはそこがシャルトルであるとは一言も言っていない。しかしシャルルシュミット(Carl Schaarschmidt, *op. cit.*)以来, 文脈上, それがシャルトルであるとするのが通説となっていた。しかるにこの解釈に異議を提出しジョンが向かったのはバリであったとするサザーンの説(R. W. Southern, *Medieval Humanism and Other Studies*, Oxford, 1970.)が現れた。彼の解釈は実証的で説得力に富むが, それは同時にプール(R. L. Poole, *Illustrations of the History of Medieval Thought and Learning*, *op. cit.*,)やクレルヴァル(J. A. Clerval, *Les Ecoles du moyen âge du Ve au XVI^e siècle*, 1895.)以来, 広く認められて来たシャルトル学派の存在自体をも否定するだけでなく, そもそも古典文芸の愛好を特徴とする中世人文主義を否定する彼のより大きな主張とも連動しており, いま彼ににわかに賛意を表するわけにはいかない。彼のポレミークな主張に対してはドロンケ(Peter Dronke, "New Approaches to the School of Chartres", *Anuario de Estudios Medievales*, VI, 1969, pp. 117-140.)やヘーリンク(Niklaus Häring, "Chartres and Paris Revised", in *Essays in Honor of Anton Chartes Pegis*, ed., J. R. O'Donnell, Tronto, 1974.),あるいはわが国の柏木英彦(「中世のヒューマニズム」「慶応義塾大学言語文化研究所紀要」第11号, 1979年)や三上朝造(「シャルトル学派とその周辺——12世紀の人文主義——」『史学』第48巻第3号, 1977年)の反論があることだけを指摘することにしてここでは通説に従っておく。

30) ハスキンス, 前掲書, 86頁。

31) *Metalogicon*, II, 10.

32) *ibid.*, II, 10.

33) 『教皇史』のテキストは, R. P. Poole (ed.), *Ioannis Saresberiensis Historia Pontificalis quae supersunt*, Oxford, 1927. M. Chibnall (ed. & Trans.). *The Historia Pontificalis of John of Salisbury*, London, 1956.

34) *EP.* 361, in Migne, *PL* (1862), CLXXXII, 562.

35) このサークルについてその一員であったプロアのビエールの証言が残っている[Petrus Blessensis, *EP.* vi *PL* (1904), CCVII, 17.]. ハスキンスは『十二世紀ル

《君主の鑑》(7)

ネサンス』でこれを W. Stubbs, *Seventeen Lectures on Medieval and Modern History*, 1900, p. 164. から引用している。「私が生活しているこの宮廷は、神の陣営であり、神の家、天国の門に他ならないと言える。私の主人である大司教の館には最も学識をもった人々が居り、これらの人々とともに、正義のあらゆる高潔さ、あらゆる慎重な配慮、学問のあらゆる形態が見出される。彼らは、祈りの後や食事の前に、読書や討論や討議事項の決定という形で自分たちをきたえている。王国の解決困難な問題がすべてわれわれに問い合わされ、そしてこれらの問題が皆の前で討論されている時には、われわれの各々は言い争ったり対立しないで、これらの問題について適切に述べるよう自分の理解力を鋭くし、より巧みな調子で自分が最も慎重で賢明な助言であると考えるところを示すのである。」。ハスキンズ、野口訳、前掲書、42頁。

- 36) *Metalgoicon*, III, Prologue.
- 37) *ibid.*, IV, 42. cf, Prologue.
- 38) 『ポリクラティクス』のテキストについては前注(25)を参照されたい。
- 39) 『メタロギコン』のテキストについては、おなじく前注(25)を参照されたい。
- 40) 『エンテティクス』のテキストは CH. Petersem (ed.), *Johannis Sarisberiensis Entheticus de dogmata philosophorum*, Hamburg, 1843. R. E. Pepin (ed.), *The "Entheticus" of John of Salisbury: A critical text, Traditio*, voll. XXXI, 1975, pp.127-193. cf. Phyllis Barzillay, "The Entheticus de Dogmate philosophorum" *Medievalia et Humanistica*, XIV, 1964, pp. 11-29. なお、念のために『ポリクラティクス』の序文にも「エンテティクス」という詩があるが、1852 首の哀歌からなるこの詩集とは異なる。
- 41) この人物との交友を軸として書簡に見られるジョンの人物像を追ったものとして、平田耀子「ペトルスとヨハネス——12世紀の2人の友人たち——」(「高千穂論叢」昭和六十年度(-))がある。なお平田氏の一連の論稿も参照のこと。「ソールズベリーのヨハネスの人物像——前期の書簡集を中心に——」(「高千穂論叢」昭和五十七年度(II))高千穂学園創立八十周年記念論文集)。「後期書簡集を通じてみたソールズベリーのヨハネスの人物像——宮廷人より煽動家へ——」(「高千穂論叢」昭和五十九年度(-))。
- 42) *Letter*, 159. 『書簡』のテキストは、W. J. Millor & H. E. Buttler (ed.), *The Letters of John of salisbury*, vol. I, *The Early Letters* (1153-1161), London, 1955; C. N. L. Brooke, *The Letters of John of Salisbury*, vol. II, *The Later Letters* (1163-1180), Oxford, 1979. ここでは、渡辺愛子氏の訳文を拝借した。渡辺愛子「ソールズベリーのジョンにみるヒューマニズムの精神」(『史学研究』第157号), 28頁。
- 43) 『聖トマス伝』のテキストは *Vita Sancti Thomae Cantuariensis archiepiscopi et martyris*, in Migne, *PL* (1893), CXC, 193-208. *Joannis saresberiensis Vita Sancti Thomae Cantuariensis archiepiscopi et martyris*, ed. by J. C. Robertson & J. B. Sheppard, Rolls Series (*Rerum Britannicarum Medii Aevi Scriptores*), LXVII, 1875-1885, ii, pp. 301-322.
- 44) 『聖アンセルムス伝』のテキストは, *Vita sancti Anselmi archiepiscopi Cantuariensis* in Migne, *PL* (1855), CXCIX, 1010-1140.
- 45) ハスキンズ、前掲書、27頁。

- 46) 同, 40頁。
- 47) 同, 85頁。
- 48) *Metalogicon*, III, 4,
- 49) この有名な比喩は古くより Newton や Bentley によって引用されて以来, 繰り返し借用されてきたし, その解釈をめぐってはさまざまな論議を生んでいる。ここではそれについて詳述しえない。以下を参照されたい。George Sarton, "Standing on the Shoulders of Giants", *Isis*, vol. XXIV, no. 1, 1935, pp. 107-9. R. E. Ockenden, "Standing on the Shoulders of Giants", *Isis* vol. XXV. no. 2, 1936, pp. 451-2. Rymond Klibansky, "Standing of the Shoulders of Giants" *Isis*, vol. XXVI, no. 1, 1936, pp. 147-9. J. De Ghellink, 《Nani et Gigantes》, *Archivum Latinitatis Medii AEvi* (Bulletin du Cange), 18, 1945, pp. 25-9. A. Buck, 《Aus der Vorgeschichte der "Querelle des Anciens et des Modernes"》, *Bibliothèque b'Humanisme et Renaissance, Travaux et documents*, 20, 1958, pp. 527-41. R. K. Merton, *On the Schoulders of Giants*, New York et Londres, 1965. Edouard Jeuneau, "Naints et Gigants", in *Entretiens sur la Renaissance du 12^e siècle, op. cit.*, pp. 21-52. idem, "Nani gigantum humeris insidentes. Essai d'interprétation de Bernard de Chartres", *Vivarium*, t. V, 1967, pp. 79-99. (idem, "Lectio philosophorum", *Recherches sur l'Ecole de Chartres*, Amsterdam, 1973, pp. 51-73.)
- 50) Raymond Klibansky, "The School of Chartres", in *Twelfth-Century Europe and the Foundations of Modern Society*, op. cit., p. 5.
- 51) このことはここに引用した文章のなかでジョンが最後に「私もまったくその通りであると思う。」と述べている点からも既に明らかであるが, 念のためシャルトルのベルナルの言葉を紹介している直前の彼の言葉を書きだしておこう。彼はこういつている。「われわれの世代はわれわれに先立ったものによって受け継がれた遺産を享受している。われわれはしばしば以前の人々よりもより多くのことを知っているが, それはわれわれが自分たち自身のもって生まれた能力によって進歩したからではなく, 他者の力によって支えられ, 祖先から受け継いだ富をもっているからなのだ。」*Metalogicon*, III, 4.
- 52) *Metalogicon*, I, 24. ハスキンズ, 前掲書 (野口訳), 116-118頁。
- 53) ハスキンズ, 前掲書, 86頁。
- 54) R. L. Poole, "John", in *The Dictionary of National Biography*, op. cit., p. 881.
- 55) ホイジンガ, 前掲論文, 133頁。
- 56) 彼らだけでなく, アベラール, クレルヴォーのベルナル, サン・ヴィクトルのフーゴといった人々もすでに1150年の終わりまでには世を去っていた。したがって念のためにいえば, 古典復興や古典愛好の精神に基づくいわゆる「十二世紀ルネサンス」とは1100年代全般を指すのでは毛頭なく, その前半期に限定されるべきであるとする主張が現在では主流となっている。
- 57) ハスキンズ, 前掲書, 80-81頁。
- 58) この点をハスキンズはつぎのように述べている。「しかし実際に, 古典にとって最も危険な敵となり, 十二世紀の古典復興を結局消滅させたのは, 宗教ではなく論理学

と実利的関心とであった。この世紀の半ば頃にアリストテレスの『新論理学』を受け入れたことで、自由学芸の均衡は弁証術の方へ強く傾き、この不均衡はさらにアリストテレスの著作集 (*corpus*) を再び知ったことで一層大きくなった。論理学と哲学を非常に多く修得しなければならなかったので、時間をかけて文学の勉強をする暇はほとんどなくなり、文学への好みも減少した。論理学が力をふるい、文学は道を譲らざるをえなくなったのである。いわゆるコルニフィキウスの徒のような新しい世代の教師たちは、文法を最小限にとどめ、それを手とりばやく短時間で教えることを鼻にかけている。これは、ちょうどボローニャの修辞学者たちがキケロに時間をかけないで実務に役立つ修辞学を教えたのに似ていた。古典著作家たち (*auctores*) は技術 (*artes*) に押されて後退した。シャルトルやオルレアンの司教座聖堂学校は古典著作家たちの学習を大いに重視したが、これに反して、古典著作家の学習は新しい諸大学のカリキュラムから消えていた。すでに一二一五年に、この種の学習はパリの学芸学部から学習過程からはっきりと抜けおちている。』前掲書、83頁。

- 59) R. W. Southern, *The Marking of the Middle Ages*, 1953, p. 103. [新村猛他訳『ヨーロッパの形成』みすず書房]
- 60) C. S. Baldwin, *Medieval Rhetoric and Poetic*, New York, 1928, p. 155.
- 61) D. D. McGarry (trans.), *op. cit.*, "introduction", p. XXV.
- 62) *Metalogicon*, I-3.
- 63) 「コルニフィキウス」については後注(71)の柏木・田中両氏の論稿を参照。「ソールズベリーのヨハネスのグランマティカ論と人文教育の理念」61頁。「ヨアンネス・サレスベリエンシスの学芸観」66頁(注8)。
- 64) *Metalogicon*, I-1.
- 65) *Metalogicon*, I-2, 24.
- 66) *ibid.*, I-4
- 67) *ibid.*, I-3.
- 68) ジョンはこうもいっている。「しかし後になると世間一般の意見が真理から逸脱していき、人々は哲学者であるよりもそう思われるのを好むようになり、学芸の教師たちが二、三年以内で哲学のすべてを与えてやると約束するに至って、ギョームとリシャルは無知蒙昧な連中の猛攻撃を受けて引退してしまったほどである。……そのとき以降、文法の研究に時間と注意がほとんど向けられなくなってしまった。』*ibid.*, I-24.
- 69) *ibid.*, I-3.
- 70) 正確にいうと、「プロローグ」、第一巻(全25章)、第二巻(「プロローグ」及び全20章)、第三巻(「プロローグ」および全10章)、第四巻(「プロローグ」および全42章)である。
- 71) D. D. McGarry, "Educational Theory in the *Metalogicon* of John of Salisbury", *Speculum*, vol. XXIII, no. 4, 1948, pp. 659-675. *idem* (trans.), *The Metalogicon of John of Salisbury*, *op. cit.*, "introduction", pp. xv-xxii. なおこの巻末に詳細な参考文献がのっている (pp. 279-294.)。その後の文献については、M. Wilks, ed., *The World of John of Salisbury*, Oxford, 1985. のなかの諸論稿および D. Luscombe, "John of Salisbury in the Recent Scholarship", pp. 21-38. *idem*, "John of Salisbury: A bibliography 1953-82", pp. 445-457.

わが国では管見の限り、柏木英彦氏の、原典の丹念な解説に基づく一連の論稿、「ソールズベリのヨハネスのグランマティカ論と人文教育の理念」(『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』第三号、1972年)、同「ソールズベリのヨハネスにおける弁証論——*Metalogicon* II-IV——」(『中世思想』XVII, 1975年)、同「人文主義の理念——ソールズベリのヨハネス」(前掲『中世の春』)と、田中峰雄氏の、十二世紀人ジョンの精神のあり方を軸に彼の学芸論を論じたスケールの大きな論稿、「ヨアンネス・サレスベリエンスの学芸観」(『史林』第58巻第5号、1975年)および「ソールズベリのヨハネス」(『教育思想史 III 中世の教育思想史(上)』東洋館出版社、1984年)がある。ともに本稿では大いに教えられた。

- 72) *Metalogicon*, Prologus.
- 73) D. D. McGarry, "introduction", *op. cit.*, p. xxi.
- 74) *ibid.*, Prologus. 柏木英彦, 前掲「ソールズベリのヨハネスのグランマティカ論と人文教育の理念」63頁。田中峰雄, 前掲「ヨアンネス・サレスベリエンスの学芸観」60-61頁。
- 75) *ibid.*, I-13.
- 76) *ibid.*, I-17.
- 77) *ibid.*, I-13.
- 78) *ibid.*, II-2, 3.
- 79) *ibid.*, I-1, 7.
- 80) *ibid.*, I-1. これは明らかにキケロの影響である。Cicero, *De officiis*, I-16, 50.
- 81) *ibid.*, I-1.
- 82) *ibid.*, I-1.
- 83) D. D. McGarry, "Educational Theory in the *Metalogicon* of John of Salisbury", *op. cit.*, p. 664ff.
- 84) *Metalogicon*, II-1.
- 85) D. D. McGarry, *op. cit.*, p. 665.
- 86) E. R. Curtius, *Europäische Literatur und Lateinisches Mittelalter*, 1963.
87. [南大路他訳『ヨーロッパ文学とラテン中世』みすず書房, 1971年]。Hans Liebeschutze, *op. cit.*, p. 3.
- 87) ジョンの引用している古代の著作家の数は文字通り膨大なものである。ここではその名前を一々列挙しない。さしあたり次を参照されたい。D. D. McGarry, "Educational Theory in the *Metalogicon*", *op. cit.*, pp. 661-664. 田中峰雄, 前掲「ヨアンネス・サレスベリエンスの学芸観」80-81頁。
- 88) Hans Liebeschutze, *op. cit.*,
- 89) R. W. Southern, *Medieval Humanism and Other Essays*, *op. cit.*
- 90) D. Knowles, "The Humanism of the Twelfth Century", in *The Historian and Character*, Cambridge University Press, 1963, p. 17 ff. 渡辺愛子, 前掲論文, 24頁。
- 91) *Metalogicon*, III, 4.
- 92) *op. cit.*, I, 1.
- 93) *op. cit.*, II, 9.